

俳句紀行「晩秋成都」

平成十六年十月八日〜十二日

十月八日（金）

台風二十一号接近で朝から小雨が降る。九州・四国はこの台風で相当な被害があったとニュースは報じていた。

成田集合は午前十一時十分。予定通り全員集合。参加者は

棚山波朗、柚口 満、武田禪次、武田孝子、中島八起、飯田真理子、坪井研治、坪井陽子、島谷高水、真木朝実、武井まゆみ、それに臺目良雨の十二名。

往復とも中国東方航空を利用。午後一時五十分成田空港発（MU524）午後二時五十分上海浦東空港着。

翼下は雲海ばかりが続く。機内で今朝乗ったリムジンバスの PR 誌(via)に載っていた

The Autumn wind blows through
little pines, a lovely name,
Bush Clover and pampas, too.

MATUO BASYO

の、芭蕉の句の原句を思い出していたがなかなか思いつか

ない。「a lovely name」のことが「しおらしき」らしいことに気づいたがなかなか完全な句に到達しないうちに飛行機は機内食の昼食を済ませるや上海に着いてしまう。

乗ってしまえば二時間半はあつという間であるが家を出てから半日がかりであることに違いはない。

（芭蕉の句は しをらしき名や小松吹く萩薄 で奥の細道の小松の町を通るときに町の名の小松と野辺の小松を取り合わせて作られた句であるが、英訳にはそのニュアンスが含まれているかどうか？私には理解出来なかった。）

上海は靄に包まれていて息苦しい気分である。四車線ある高速道路は渋滞寸前。浦東（ブードン）空港から虹橋 1（ホンジャオ）空港へ移動するバスは、江南地方特有の靄の中に沈み行く大きく赤い入道を追いかける。また高速道路に沿って「磁浮列車」（リニア・モーターカー）が高速で駆け抜けるのを見る。上海は日進月歩で成長して留まることを知らないようだ。中心街を逸れた外周を走って虹橋空港へ行こうとしているので町の華やかさは感じられな。

上海の大き入日に秋惜しむ 棚山波朗
秋の蚊につきまとはるる飛行場 臺目良雨

ぶいどん

浦東の残る原野に秋日濃し

袖口 満

秋ともし浦江をくだる達磨船

武田禅次

上海の没り日へユツカ総立ちに

武田孝子

楊柳へ色無き風の豊かなる

飯田眞理子

晩秋の上海外環煙濃し

坪井研治

唐の国晚稲眼下に着陸す

真木朝実

並び立つユツカの花に落暉かな

島谷高水

秋の江船それぞれの燈かな

武井まゆみ

鍛錬大会らしく、乗り継ぎの虹橋空港の中のレストラン「候
机楼餐飲」で第一回の句会を開いた。



上海虹橋空港内食堂で句会



成都空港に着いたのは24:00
ぐったりして荷物を待っている。

午後九時二十分虹橋空港発 (MU5425) 午後十一時四
十分成都双流国際空港着。空港で荷物を受け取っているう



晴れるとこのように見える人口1,000万人の成都の町(インターネットより)

ちに夜中の十二時になってしまった。東京では、時差を考
えるともう午前一時になっている。

出発時間が遅れた上に成都空港ではエプロンを離れたと
ころで降ろされたが、これはフランスのシラク大統領一行
が直前に着いたためと出迎えに来てくれた武田氏友人の話
で納得した。

宿泊は 十月八日、九日、十日共、四川ホテル(総府街3
号電話028-8675-5555) (二泊460元く
らいのランク) 波朗氏と同室。

本日の歩数、六二〇四歩。

まゆみの独り言

十月八日（金）成田空港、黄昏の上海、夜霧の成都へ。

成田空港で、武田（夫妻から、殿方にはグリーン色、ご婦人方にはオレンジ色のバンダナが手渡され、「成都吟行会」の一路平安を祈って結束を固めます。さて早くも成都にむかう国内線「上海虹桥空港」までで二句とのお達し。

当日は国慶節休暇明けとあって、機内もなかなか混んでおります。「晩稻眼下に」無事着陸。浦東国際空港から虹桥空港へ。空港内の食堂で短冊が配られ、麺類などを頂きながら半分気もそぞろ、選句まで終了して、成都行きフライトへ。「上海蟹を手土産に」する乗客も。

夜霧の成都に着陸。成都はまだの名を錦官城とも、芙蓉城ともいいます。三菱商事成都事務所・胡さん、運転手さんにお出迎え頂き、四川ホテルへ。途中、中国とフランスの国旗を交互にあしらった飾りがいくつもとりつけられております。なんと、シラク大統領が成都を訪問されたよし。街の中心「天府広場」には毛沢東の像が。ホテルでは観光ガイドの勁全麗さんがお待ちかね。明日は八時出発です。

十月九日（土）

曇り。

午前六時半起床。七時朝食（バイキングは庶民的な雰囲気野菜中心の料理）。八時出発。

案内は邵（シヨウ）全麗女史（四川チベット国際旅行社社員）。

邵（シヨウ）さんは四川の大学の日本語学科を卒業してガイドをしているとか。細身でキビキビとした歩き方をする。武田禪次氏の話と邵（シヨウ）さんの話を足すと殆んどのが分つてしまいそうな雰囲気になる。

邵（シヨウ）さんの話を中心に少し細くして成都の町の紹介をしてみると、

四川省は人口八〇〇〇万人。かつては中国国内で最大の人口を擁していたが今は、河南省、山東省に次ぎ三番目とのこと。

平均海拔五〇〇^ミで周囲には山岳地帯があるので四川盆地に人口が密集している。この周囲の山岳が天然の要害になつていて蜀の国を攻め落とすのは大変なことだった。

蜀に入るには長江を遡って船で入るか、長安（西安）から山岳の道を分け入って入り「蜀道難し」と李白に言わし

めた苦勞を味わって入るしか方法がなかった。

気温は三〇℃からマイナス一℃で過ごしやすいと言うが一年を通して日照時間が少なく霏のかかることが多いので四川省では「晴れると犬が驚いて吠える」例え話もあるほど。

また「巴山夜雨」のように夜雨が多いのも成都地方の特徴である。

「天府」の町と言われ豊かな町であるのは秦の時代に作られた人工ダム（都江堰）が四川盆地を潤し実り豊かな台地を作り上げたことによる。天という言葉には、高いところに位置するこの地方の特徴も含まれている。

ダムも成都の町も二四〇〇年前からすでにあり、蜀の国と呼ばれた時代の「三國志」や「三國志演義」の諸葛孔明や劉備らは「武侯祀」に祀られて今でも市民から尊敬されている。諸葛孔明の「無私」の清々しさによるものだろう。

また成都は別名「錦官城」と呼ばれ、錦織の盛んな町であり町には幾筋もの川が流れ緑の濃い穏やかな町である。

数年前に中国映画『変面』が日本で上映されたが、この変面の芸を誇る町でもある。

変面は「変臉」（ビエン・レン）と言い、顔を変えるところで字義のごとく顔を覆ったお面を次から次へ替えてゆく早業を披露する成都で父子相伝されてきた芸である。北京の京劇と共に川劇（せんげき）と呼ばれ親しまれてきた。

実際に見た川劇は外国人や中国国内の観光客向けのようであるので「サワリ」の部分しか上演しないのでその真価はよく分らなかつたが、日本の人形浄瑠璃に似た人形遣いの演じる「変面」の技術の高さは驚くべきものであった。是非鑑賞しておきたい芸のひとつである。

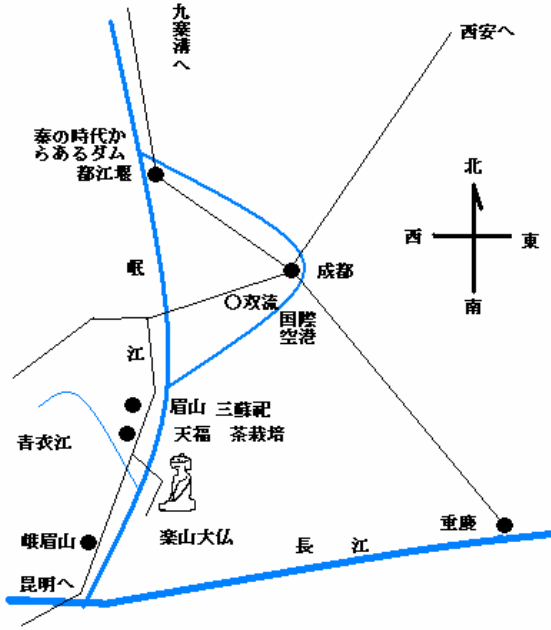
詩人杜甫が晩年の四年間を過ごし優れた詩を残したことが成都の町の名をどれほど高めたか測り知れない。杜甫の旧居を中心に「杜甫草堂」が作られ市民の憩の場になっている。

中国語は発音が難しくピンインという発音記号が補助をしてくれるが、小学校の段階から正しく発音させる目的で漢詩の朗読を授業に取り入れて暗誦させている。当然漢詩に興味を持つ子供たちも多く「杜甫草堂」は老若男女で賑わっている。

漢詩についても一言。中国は武將・政治家が詩を詠むのが当たり前の国。この伝統は日本にも受け継がれてきたはずだが最近の日本の政治家はこの伝統を忘れている人が多いようだ。「杜甫草堂」の一角にある毛沢東の詩碑を見ると政治家の資質の日中の違いが浮かんできるといえる。

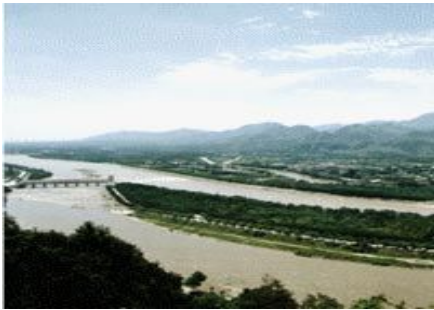
もうひとつこの町にふさわしいものは唐の女流詩人「薛濤（せつとう）」の塚のある望江楼公園の竹林であろうか。

成都盆地の霧が育んだ竹の優しさに身も心も包まれてゆく
 思いになれるところである。ここにいと成都の曇り空も
 気にならず何時間でも過ごせそうである。



都江堰

古代中国が開発した四大水利の一つ。秦の始皇帝が蜀郡守（知事）李冰に命じて作った二〇〇〇年以上の歴史がある。暴れ川であった岷江を外江と内江の二つに分離させる難工事をすでに秦の時代に行ったことも驚きであるが、それが今も利用されていることはさらに驚きである。この水利ダムによって四川省は米作が安心して出来るようになり蜀の國は「天府」と呼ばれるようになった。



左 上流 都江堰 右 下流
 手前側が岷江本流で、外江と呼ばれて長江へ注ぐ。
 上側の内江が成都市内など四川盆地へ流れる。
 中洲の先端が魚嘴、橋に見えるのが水門 ①



二王廟と魚嘴をつなぐ吊橋



魚嘴から上流を見る。

二王廟
丁事者李泳とその息子を称えた



外江に設けられた水門とモーター。



昔、工事に使った木の杭と石を詰めた蛇籠。杭を縛る縄は竹の皮を編んで作った竹縄



秦の時代の都江堰工事風景

手前の岷江の流れの中で溢水し易い箇所を一時的に堰き止めて、人工水路の内江を作ろうとしている。右上奥から成都の町へ水を流す。岷江が大水になった時は増水した分だけ水が外江へ再び還流する仕組みになっている。右の櫓の下で景気付けのために喇叭を吹く一団が見える。左の筏のあたりが魚嘴に当たると考えればよい。岩を削って水路を作るとき、岩の上で火を焚いて熱した直後に川の水をかけて冷すことを繰り返して熱疲労で岩を脆くさせて掘り進んだとされる。(都江堰内の建物にある絵図から良雨解説)

都江堰

岷江や渦が渦生む秋の果て
 渦巻きし魚嘴の激流秋燕
 龍淵に潜む都江の水濁る
 水嵩の落ちて蛇籠の千草かな
 磧石に色なき風の都江堰
 秋霖や笛くぐもれる都江堰

道中

杖に似し蜀の竹笛秋深む
 田仕舞のいちにち靄や蜀の国
 藁ぼつち四川百里を霧つつむ



都江堰の付近の食堂で句会 ①

上海や北京の都会と違い田舎の食事の値段は格安。12名でお腹一杯食べて三百数十元(5,000円)ほど。中国はどこで食べても料理はおいしいのがうれしい。日本の田舎の食堂とは雲泥の差があるぞ。

棚山波朗
 柚口 満
 武田孝子
 武田禅次
 坪井研治
 武井まゆみ

棚山波朗
 藪目良雨
 武田孝子

まゆみの独り言

十月九日(土)：都江堰までの路上、朝靄の都江堰、武侯祠、草堂。邵さんはお仕事の都合でたまたまご主人と離れ離れとのこと。都江堰までの路上も皆さん興味深深。

車のプレートに「川A」とあるのが、成都の車で、「川O(ゼロ)」が政府の車とか。「四川大学」食堂のマーボー豆腐を所望するお声も。「虎虎虎髪型」の看板になぜか歓声があがります。花売がいて、花の名を問えば「黄桷蘭」と。早速求めてみると甘い蘭の香り。

「成灌高速」、灌県を通り都江堰市へ。道路の両側には赤や黄のカンナが目立ちますが、成都ではカンナを「虞美人草」と呼ぶとのこと。道端に植えられた上向きの枝に咲く黄色い花は「荊花」とのこと。「鶏を運ぶ檻」の車も。李冰、李二郎の像も通り過ぎました。都江堰に到着。

「都江堰は成都市街から五九km。紀元前三世紀に築かれた巨大な水利施設、蜀郡太守の李冰が築造、逆巻く岷江もここを経て害が利に変わり、宝瓶口から内江に流入、農民に福をもたらしました。

まゆみの独り言

都江堰は魚嘴・飛沙堰・宝瓶口の三部分からなり、魚嘴は河心に築いた分水堤で、魚の口のような形をし、岷江の流れを内江と外江に分つ。外江が岷江の主流で、内江が宝瓶口を経て河西平原に流入し、農地をうるおす。飛沙堰は魚嘴と宝瓶口の間にあり、魚嘴からながれてくる推量を調節して内江に流れすぎないようにする。宝瓶口は玉壘山を開削したもので、岷江の水を内江に引き入れる入水口で、瓶の首のような離堆をなす。〔中国名勝旧跡事典〕ペリかん社より跋)

最初に「秦堰楼」から岷江が「魚嘴」で外江と内江に分かれる全貌を俯瞰します。川霧とでも申しましょうか、だいぶ靄つてきており外江の向こう岸は山水画そのもの。楼から身を乗り出すと秋燕がたくさん飛び交っています。なんと二二〇〇年前に堰を作るといふ構想があつたなんて。

「二王廟」へ。ここには李冰、李二郎の像が祀られております。階段を下りると、右と左に大きな鉢に植えられた紫薇の樹(さるすべり)。更に降りると正面には鄧小平の書「造福万代」を銅で作った額。

更には、「逢正抽心」と書かれた石碑があり、「心」の字が白抜きになっております。目をつむり、左手を「心」に触れます、右を触った人はカカア殿下、左を触った人は恐妻家。

まゆみの独り言

良雨先生がさっそく試す。左でした。でもよくよく考えればどちらにせよ「差不多」（たいした違いはない）。

石壁に馬つなぎの跡も。廟内を抜け、魚嘴を目指し歩きます。途中、中洲に埋められているという人頭ほどの石のつまった蛇籠の見本が。籠は細く切った竹を縫って作られています。長細く切った竹で編まれたケープル「安瀾索橋」の「揺れいつまでも」するスリリングな橋を渡ります。魚嘴は河が分かれるところ、まさに「渦が渦生み」「渦せめぎ合う」ところです。

中国現代の文筆家余秋雨（一九四六）はその著「文化苦旅」の中で、「中国の歴史の中で人の心を激しく揺さぶるのは万里長城ではなく、都江堰だと思ふ。」とし、「造橋千年」（後世まで民に幸をもたらす）とその理由を挙げ、更に「四川有幸、中国有幸」と、李冰の存在とその業績を高く讃えています。

さて、「觀光車」に乗り金剛堤を移動、「宝瓶口」へ。こちらには内江の水を更に調節するところ。山の崖には「しぶきに濡れし乱れ萩」が。途中、葫蘆絲というひょうたんで作った笛の調べが聴こえ、わたし達が通ると、曲が「北国の春」に変わります。お昼は四川風味のレストラン。食後までに五句。この時点でまだ句が体を成していなかった私は、ろくに箸もつけられず、

まゆみの独り言

宴も酣を過ぎなんとか五句を絞り出したころには料理もまはら、美味しそうな家常豆腐の一切れを真理子さんに懇願しておすそ分けして頂いた次第。ガイドの邵さんも選句に参加します。なんと、先生方の句を軒並み選句されました。参りました！

やっと第一日目の後半戦。もう何日も成都にいる気分。「武侯祠」と「草堂」で五句。

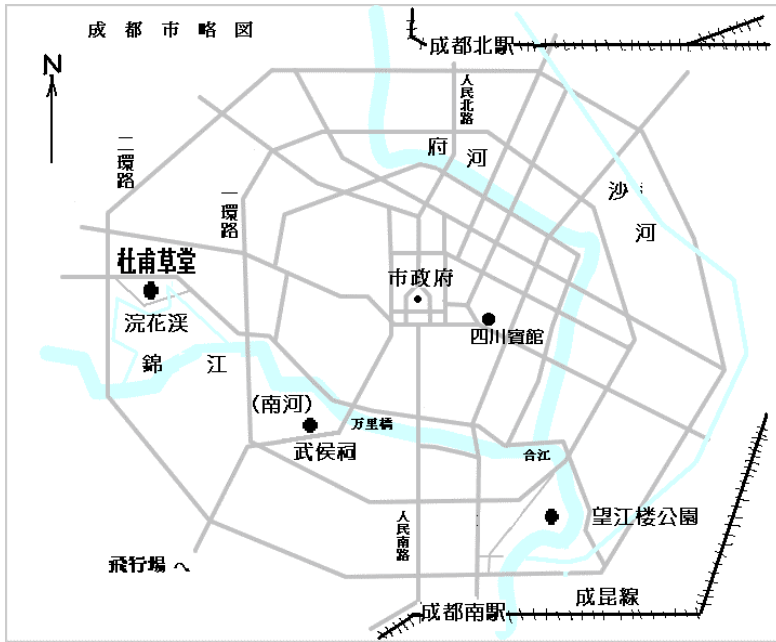
「武侯祠」へ。

ここは恵陵（劉備の陵）と、劉備、諸葛孔明など蜀漢の君臣を合祀した廟からなり、二二三年に作られました。

まず、大門内右手の三絶碑を拝見（唐八〇九年建立）。それから諸葛孔明が劉備の子劉禪に奉った上奏文「出師表」を岳飛（一一〇三～一一四一、南宋の武將）が揮毫した書の木刻に見とれます。

諸葛孔明の像の前にある銅鼓は「諸葛鼓」（丸い器ふたつを合わせたもので、開けて鍋として、また合わせて太鼓としても使うとのこと）。展示室には、諸葛孔明のシンボル「羽扇」や、「木牛」という農耕道具、また蜀漢時代のさまざまな備が「笑顔ゆたか」に並んでいます。

「恵陵をひとめぐり」、周りを小鳥がたくさん飛び回っていました。一巡して雌雄の銀杏の樹。つぎの目的地「草堂」に向かいます。



武侯祠

成都市郊外（錦官城外）にある三国時代の蜀漢の宰相・諸葛亮（孔明）を祭った社。六世紀ごろから建てられ始め、明代には隣接する主君・劉備玄德の陵墓、漢昭烈廟と併合された。孔明の諡名である忠武侯にちなむ武侯祠として親しまれている。戦火のため、現存する建物は清代康熙の一六七二年に再建されたものだ。3.7万平方メートルの広大な境内には、南北方向の中軸線に沿って大門、二門、劉備殿、過庁、諸葛亮殿の五つ主体建築がある。劉備殿には金泥の劉備像が安置され、側棟には関羽、張飛ら文官、武官の塑像がある。諸葛亮殿には、孔明の像や南征時に鍋や銅鑼として使ったという、諸葛亮自ら作ったといわれる青銅製の巨大な「諸葛鼓」などの文物が納められている。また、大門を通ると、生い茂る緑の中に六通の石碑があり、中でも孔明を称えた唐代の八〇九年建立の石碑はかなりの文物価値を持っており、「三絶碑」と呼ばれている。これは唐代の著名宰相裴度の記事を書法家柳公権が書き名匠魯建が彫ったものである。（成都市ホームページより）

先主劉邦の跡を襲う機会があったにも拘らず劉邦の子・劉禪への忠節を誓った諸葛孔明の「無私」の心が今もって中国の人の心を魅了している。



劉備の子・劉禪



劉備女徳の像



羽扇を持つ諸葛孔明の像



孔明の「^{すいし}前出師の表」 書 坵 飛

孔明の「諸葛」
鉄製で着炊きも出来る。



張飛の像



武侯祠内部の赤壁 赤壁の戦いをイメージか？

諸葛碗と書かれてある。
どのように使うのだろう。



園内には「三国志」時代の遺物が展示されている。



塑像。太鼓を叩いているのか？



はあ。なんでござりますか。



絶壁にへばりついているのが蜀の棧道の模型。狭い棧道を通して軍馬物資を運ぶために諸葛孔明は「木牛」なる「輪車」を発明したと言ふ。

杜甫草堂

唐代の詩人・杜甫が成都に住んでいた時の居所。七五九年から約四年間、安祿山の乱を逃れた杜甫が樹齡二〇〇年以上の柏（ヒノキの一種）の木の下に仮小屋を造り、質素な生活を送った場所。彼の全作品一四〇〇首のうち代表作を含む二四七首がここで生まれた。唐の末、杜甫を記念するために仮小屋の跡に草堂が建てられ、明代に再建されて今日に至る。今も杜甫草堂はひっそりと竹林の中に質素なたたずまいを見せている。庭園式の建物で大門をくぐり、蓮花池を渡ると、木の生い茂る中に三重の庁堂がある。草堂書屋には古今の杜甫詩集などの書物が展示されている。



杜甫像



陶器の欠けらを組み合わせて文字が作られている。



時間がゆっくりと流れる園内。

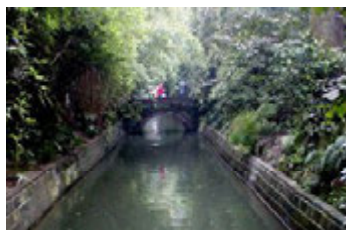


杜甫草堂が菊花翁で面している。



柏森たる草堂

草堂園内の小流れ



草堂園内の茶館を借りて句作り。

桂花茶を啜りながら過ごす贅沢な時間。まさに秋惜しむ一行。
籐椅子の車は音、小鳥の声。爽麗な金木犀の香りまでただよ。



薬草や雛鳥を丸ごと煮たスープに豚肉や豆腐、各種野菜を入れて食べる。



鍋が煮える間も句会。

「杜甫草堂」は、唐の詩人、杜甫が四〇代後半より約四年間住んだ場所。入口右手壁には「熱烈歓迎シラク大統領」とあり、当日午前中にシラク大統領が見学された由。竹のトンネルをくぐり、詩史堂を抜け、「少陵（杜甫夫人の陵、草堂）碑亭の前で記念撮影。「柴門」をくぐり、「ほの暗き杜甫草堂」へ。自分の茅葺屋根が秋の暴風で飛ばされてもおかつ貧しい人のために住めるような大きなお家を手に入れたいと詩に読んでおられた杜甫の優しさを思い出しました。杜甫の詩には鳥がたくさん出てきますが、小鳥も杜甫を慕って遊びにくるようです。そろそろ一息いれたところ、庭園の椅子に座り啜り茶を頂きます。

近くではトランプのような長いカード（「賓王紙牌」と言いカードには水滸伝の人物が描かれていました）遊びをしている人も。園内には大きな実のついた芭蕉の木も植わっていました。劬さんが用意してくださったプリントを見て、杜甫の詩「春望」「春夜喜雨」をまずは日本語でみながら秋の庭に集いて和し、その後邵さんが美しい中国語で詠じてくれました。中国語の美しさを感じるときです。

草堂の目の前には浣花溪が流れ、その向こうには別荘らしき豪華な建物があります。坪井ご夫妻に盛んに勧められる方もいます。

夕食は「薬膳火鍋」（「御膳坊」：一階には漢方薬の老舗「同仁堂」がありここが経営している）。火鍋の中身は烏骨鶏をベースに、朝鮮人参、枸杞（くこ）、草魚、ハム、肉団子、乾豆腐、筍、木耳、ほうれん草などが盛りだくさん。薬膳効果で翌朝まで身体もほかほか。

まゆみの独り言

薄もみぢ杜甫の居室に窓一つ
愁思かな杜甫草堂の籐の椅子
小鳥来る劉備は福の耳持てり
陶備の笑顔ゆたかや秋闌る
草堂の風暗きまで竹の春
色変えぬ松をそびらに出師の書
ほの暗き杜甫草堂の秋燈
赤のまま蜀惠陵に首垂れ
秋の庭集ひて和せり杜甫の詩
秋の鳥垂るるもありし屋根の草
武侯祠や風さはさはと竹の春
武井まゆみ

本日の数歩 七四一二歩。

棚山波朗
藁目良雨
柚口 満
武田禪次
武田孝子
飯田眞理子
中島八起
坪井研治
島谷高水
真木朝美
武井まゆみ

十月十日（日）

朝起きると昨日と同じく霧がった成都特有の空である。

朝食を済ませバスに乗る時間になると薄日が差す。それでも「驚いて犬が吠える」ほどの上天気ではなさそうだ。

夜来の雨が上がって清々しい空気の味がするようである。市政府広場前に「国慶節」を祝う巨大な菊文字が置かれている。雨上がりで菊の花の色の精彩が良い。

今日は日曜日であるが「国慶節」の振替で平日扱いになり、通勤の人の自転車、電気自転車、電気バイクの大勢の人が道を走っている。混雑しているが、成都のように再開発された町は歩道、自転車道、車道に分かれているので道を横切るとき以外は安心して走っているようである。

北京や上海のような大都市で古い町並の残る市街はなかなか再開発できないので狭い歩道を人は歩き、自転車は車道を車を避けながら走らなければならない。

三節は中国人にとって大切な祝日。「春節」（旧暦の正月）、「五一節（メーデー）」（五月一日）、「国慶節」（十月一日）にはそれぞれ一週間のお休みがある。

国慶節に十月一日から七日までお休みしたので、八日から一週間仕事をしなくてはならない。今日は日曜日にもかかわらず出勤する光景を見ることができたのは、こうした理由による。

バスは成都から南下して峨眉山の少し手前にある樂山大仏を觀に行く。途中「眉山」、「天福」の町がある。

司馬遼太郎の『街道を行く』（二十）中国蜀と雲南のみち）を読むと日本の農村の景色に似て曲り屋を持つ農家がある」と書いてある村々を通過してゆく。

稲藁が田の中に藁ポッチとなつて積まれて、ところどころ畦伝いに稲架木が植えられている。煉瓦作りの水路が見え、田はやがて棚田になり、蓮田、蜜柑畑、桑畑、大豆、隠元畑などがまるで日本にいるように見えてくる。

小さな山々が連なり始めると山肌一杯に茶の栽培をしているところが見える。「天福」という村だそう。古来から茶の栽培で有名で、チベットへ通じる「茶馬古道」を運ばれた茶はここで作られて送り出されたものと言われる。

菊の艶洗ひ揚げたり昨夜の雨

暮目良雨

水牛の草食む蜀の豊の秋

飯田眞理子

蜀人の蓮根掘るや高曇り

中島八起

煉瓦水路長し高粱熟るる中

島谷高水



棚田はまさに日本の景色と同じ。



成都〜樂山間に天福という茶どころがある。山に登る茶畑



拝観客から大仏を見上げる。



樂山大仏拝観船のひとつ

樂山

岷江を下流で横ぎって程なく樂山に着く。樂山大仏詣での大勢の人で混雑している。

展望船で岷江を下って大仏様を水上から拝み、戻ってからは徒歩で大仏の彫られた山の頂上まで登り、寺院を参詣してから大仏様の右側の山に掘られた階段を下りて渚に降りて下から大仏様を仰ぎ、帰りは反対側の山道を登って頂上の寺院に着き、再び山を降りてバス乗り場まで歩くというなかなかハードな参詣である。

乗船料が五十元。参観料が七十元。



足元から見上げる樂山大仏。㊦



楽山大仏様の顔の大きさは三丈ある。



崖の栈道を降りて大仏の足元へ着く。



屋台で赤大根を買って齧る。



揚げ物の屋台。豆腐、ソーセージ
雛鳥丸揚げ、肉団子。



山湾賓館に1時間留って到着。一部分だけ
照明をつけてもらって食事。ビール庫の鍵を
持った責任者が見つからずみなみなビールが
飲み終わったのも思い出になった。



楽山大仏への参道の出店。後ろは町工。



大仏の頭の前近から楽山市を見る。右が岷江上流、左から流れてくる濁流、青衣江と大渡河が合流して流れこんだところ。三江の社会うところである。

秋蟬に楽山大仏耳すます
大仏の螺髪に草の紅葉かな
西瓜積む観仏船の操舵室
秋蝶や慈悲の手大き石仏
色鳥来眼の切れ長な磨崖佛
秋日さすどつかとおはす仏かな
秋扇広げ大仏見上げけり
天高し顔三丈の石仏
大仏や御肩に清水滲ませり
大仏の御眼細めて秋の水

棚山波朗
墓目良雨
柚口 満
武田禅次
武田孝子
飯田眞理子
中島八起
坪井研治
島谷高水
武井まゆみ

まゆみの独り言

十月十日（日）：成都一日目。

楽山と眉山（三蘇祠）、そして川劇。

今日は昨日とうつて変わっていいお天気になりそうです。成都では「太陽が出る」と犬が吠える」ということで、「今日は犬が吠えているよ」と満先生。

楽山市は成都の南一六四kmに位置し、風光明媚な大仏の街として有名。文学者・政治家の郭沫若（日本の九大医学部卒）もこの出身。

楽山大仏（正式には凌雲大仏）は、岷江を臨む岸壁に彫られた、高さ七一M、肩幅一八Mの世界最大の石刻坐仏。大渡河、青衣江が凌雲山の下で交わり岷江に流れ込む地点は、昔から水害に見舞われており、この氾濫を鎮めるため、唐・玄宗の御世に凌雲寺の僧・海通が大仏の建立を思い立ち、九十年かけた後の八〇三年に大仏が完成したとのことです。

大仏の全景を眺めるため、楽山港から出る船にのります。

「遊江観大仏全景」↓「睡仏」↓「三江」の観光船が十一時になりやっと出発。台湾からの観光客が目立ちました。船から「顔三丈の」「どつかとおはす」大仏の御姿を拝します。またしばらく乗り、石仏の刻まれた山とその先の島を合わせると大仏が眠っておられるように見える場所で船が泊まります。秋の蝶がしきりに川面を飛びまわります。船からは見えませんが、ちょうど寝釈迦の心臓のあたりに、先ほど見た石仏が位置しているようです。

まゆみの独り言

下船後、凌雲山を登り、今度は大仏を近くで観るために丘に登ります。上りの階段は急で疲れましたが上りきるとやっと展望が開けてきました。郭沫若の像前の展望台からは、都江堰から流れてくる岷江と大渡江の交わった箇所が砂色と灰色にくっきり分れている様子が見えます。棗の実らしきものがあるので尋ねると、助さんによれば「酸棗」というそうで、名の通りとてもすっぱいとのこと。十三階建ての「靈宝塔」のところには下草に「龍の玉」が実っています。その後凌雲寺の海師堂で大仏を彫り始めた海通和尚に敬意を表し、棧道へ。

それは急な凌雲棧道を降り大仏を下から拝します。高所恐怖症と自称される坪井さんなんか降りることができませんでした。

大仏の上を雲がながれていきます。大仏日和です。

大仏の前には「大彌勒宝鼎」と彫られた大きな鼎が置かれています。また急な棧道を登り、上で待っておられた波朗先生、良雨先生と合流。展望の開けたところから、梅檀の実を見ることができました。

山を下りてバスに向かう途中、屋台がならび、良雨先生は皮の赤い大根を求められて齧り始めました。私も少し頂戴すると、ほのかに辛味がのこります。また自転車でリンリンと鉦叩きをしながら物売りが通りました。籠の中をみせてもらおうと白いものがあり、鮎屋さんでした。切り売りしてもらい、バスの中でみなさんに回します。材料はもち米とのこと。昔なつかしい味です。

まゆみの独り言

お昼は「山湾飯店」で、蜀風味を味わい、出句五句。移動のバス内で選句と披講が行なわれます。

バスは一路眉山へ。車窓からはなつかしい田園風景が。

眉山にある三蘇祠。三蘇とは、宋代の大詩人蘇軾（蘇東坡、蘇洵（父）、蘇轍（弟）の三人を指します。

園内には父子三人を奉った大樹があり、蘇洵の樹は榕樹、蘇軾・蘇轍の兄弟は大銀杏で、「眉州第一樹」と紹介されています。

正殿の前には三本の太い紅色のお線香が燻っていました。禅次氏は蘇東坡に敬意を表し像の前で「叩頭」の礼をさされておられました。

展示室では蘇東坡の筆致を伺うことが出来、十七歳の時に箒で書いた「連麓山」という字の「山」の字が等身大に紹介されていました。

蓮の池には敗蓮が見えます。蘇宅の古井戸には金木犀がこぼれております。

さて邸内を散歩しておりますと、鳥の鳴き声が盛んに聞こえてきました。近づいてみるとそこは市民の公園になっており、樹の枝枝に鳥かごが掛けられ、画眉鳥が声を競い合っています。じつにのどかな景色です。

眉山（メイシヤン）三蘇祠

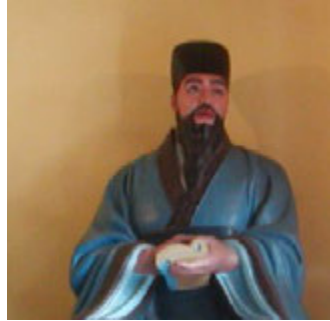
眉山は蘇東坡（蘇軾）の故郷。



父 蘇洵



この父にしてこの子あり。



蘇軾



弟 蘇轍



三蘇祠入口 外国人ということで入場に手間取った。



蘇家の古井戸を覗く。



毛沢東の自筆の誌牌が飾られている。



三蘇祠の裏市民公園となっている。
鳥の鳴き声や麻雀、将棋カルタに
余念が無い。老人天国万歳

父子の樹のどれも高しや小鳥来る
したたかな秋の蚊残る三蘇祠
木犀の花くず積もる蘇家の井戸
三蘇祠に二胡のひびけり水の秋
秋の日に温む蘇の鐘触れにけり
画眉鳥を木の枝にかけ秋惜しむ



蘇軾（蘇東坡）の像の前で。

棚山波朗
柚口 満
武田禅次
武田孝子
飯田眞理子
中島八起



小吃（ファーストフード）城で料理の小皿を次から次へ重ねてゆく。待った無しに置いてゆく。この庶民が良い。

三蘇祠に樹下麻雀の秋日和
金木犀古井戸のぞくとき香る
大甕に桂花散り浮き秋日濃し
秋麗画眉鳥こゑを競ひたる

坪井研治
真木朝実
島谷高水
武井まゆみ

田園風景

稲刈りし田に家鴨飼ふ東坡の地
稲移す天秤担ぎ日暮れまで
藁塚の屋根より高き蜀の国
粉を焼く煙をちこち蜀の国

棚山波朗
暮目良雨
武田禅次
中島八起

夕食 「成都小吃城」

まゆみの独り言

今日はだいたい歩いたので疲れました。この町の名物「小吃」を楽しんでから川劇を鑑賞する予定になっています。

さて、夕食は軽め（といっても二八種類）の小皿料理、「成都小吃城」というお店でいただく。

そのあとはいよいよ川劇を観に。雰囲気のある小屋掛けのような雰囲気のある舞台の一番前に席をとってもらい、「幕前の落花生」をつまみお茶を頂きながら待ちます。

若い女性が口先の長いチベット風の急須で湯を足してくれます。

さて、蜀の音楽の演奏が始まり、続いて「布まわし」の人形芸、いよいよハイライト「変臉」（顔を変えろという意味）と「火を吐く男」。目を皿にして観察しておりますが「変臉」（ビエンレンと言っ）のからくりは誰にもわかりません。

その後の「手影絵」では、鳥や馬、兎などが次々とびだして手ひとつでさまざまな動物の表情が現われ会場からはため息が。

最後に恐妻家のコミカルな劇（この恐妻家はうたれづよいところからゴムひもを表す「皮筋尻」と呼ばれるそうです）が催され、幕引きとなりました。

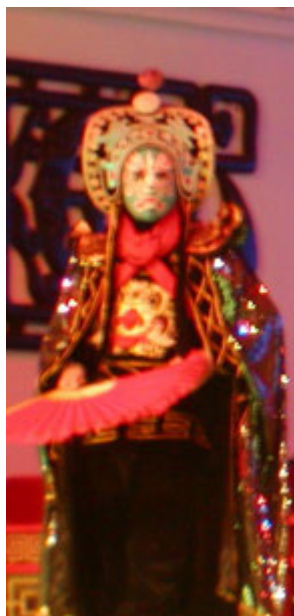
川劇（せんげき）



川劇（せんげき）の華やかな舞台。時代劇。二胡、影絵、コント。変面、人形による変面。スピーカーの音量が大きすぎた嫌いもある。



十数枚の面を変えて素顔を見せた後再び面を被る。
この技はどう考えても不知道 万雷の拍手の一瞬 ㊦



変面の一コマ。動きが早くて撮影は
難しい。



転燈という「お仕置き」のコミック。
麻雀で遅くなった夫の頭を妻が蠟燭
の火が点いた皿を載せて懲らしめて
いる。 ㊦



手景絵 手指で作った鳩と接吻する場面
18歳の少年。 ㊦



人形使い。指が動きハンカチを握ったり
極めつゝ変面を行う。作ひ寂びは
無いが、日本の人形争留離より技術は
上。恐るべし中国の芸能。 ㊦



茶碗にお湯注ぐ女性。これも妙技。㊦



川劇演舞場。背中を見せた男は按摩をする。㊦

川劇の舞台の袖に虫鳴けり
 変面のつぎつぎ蜀の夜長かな
 川劇の果てて成都は虫の闇
 秋燈や蜀の人形しな作る
 秋燈や蜀の錦の色極む
 川劇に影絵のうさぎ秋夜長
 蜀の秋操り人形火を吐ける
 手影絵の野兔月に跳び立てり

本日歩数 九五五〇歩



望江楼公園内 雨上がりの竹林の中。秋の筍も出ている。

十月十一日(月)
 望江楼公園

まゆみの独り言

十一日（月）、晴れ。望江楼公園、寛巷子・窄巷子、市場

まず、「望江楼公園」へ。ここには唐代の女流詩人、薛濤（せつとう）が紙を漉いたという井戸があり、また一五〇種類以上の竹が植えられており、竹の公園としても有名。

薛濤、字は洪度。長安出身、四川で零落して妓女となり（他説あり）、後に引退して浣花溪に住み、白楽天や杜牧らと詩を交換したとのことです。

園内の重要な建物が、川辺にたつ「崇麗閣（通称が望江楼）」で、下二層が四角、上二層が八角の作り。近くを流れる「府南河」（都江堰の内江から成都に流れている）沿いの柳の木に雀などの鳥が集っておりました。

園内では市民が気功や太刀を持った運動をしたりしています。

竹の皮をつけたままぐんぐん生長している竹もあり、また筍がたくさん顔をだしていました。

薛濤像のところに来たとき、ちょうど鶴鴿が羽をやすめているのに出逢いました。鳥の声を聞きながら竹のトンネルを抜けると、「唐女校書薛洪度墓」と書かれた丸い山状のお墓がありました。

邵さんがお茶を頂ける場所を手配してくれました。

入口で求めた焼き栗を頂きながら、昨夜の「川劇」二句で句会が始まります。

今回は邵さんの投句もあり。そのうちの一つが滑稽劇を詠んだものです。邵さんによれば、例のコミカルな出し物は「転灯」といい、恐妻家の男が頭に灯をつけた皿をのせたまま台の下をくぐったりする罰を受ける劇で、それを句にされました。

「転灯を罰として麻雀をする恐妻家（邵全麗作）
五・七・五の俳句のリズムと若干異なるため、先生方が次のように直されました。

まず、良雨先生。「転灯の夫（つま）立っている虫の闇」。

続いて、波朗先生。「転灯の夫に笑ひや夜長劇」。

さすが先生方、季語をみごとに読み込み味わい深い句となりました。



望江楼園内の茶館の一室で句会。



薛讷のふくよかの顔

崇巖閣（通称が羊楼 錦江に面している）



唐の女流詩人・薛涛



唐女校書薛洪度墓



薛涛笺



陳麻婆豆腐店



まゆみの独り言
 さてバスに乗り、ここで「薛涛笺」を買い忘れたことに気づきあわてて求めに戻ります。
 赤い紙ではありませんでしたが、「指にやさしい」手触りの中国画の描かれたものでした。
 近くの小学校ではラジカ体操の最中。
 途中バスの中から「水井坊」という酒屋さんを禅次氏が紹介。四〇〇年の歴史を誇る酒屋で、日本円で一万円を超えるとのことですので、高級酒店です。



鶏公車に乗る棚山波胡



清代に満族の貴族が住んだ街

まゆみの独り言

その後、「寛巷子・窄巷子（広い路地・狭い路地）」へ。

このあたりは清代に満族の貴族が住んだ街で、門のところに龍の彫り物があるなど、どこか北京・胡同の面影があります。ここは取り壊されて道が拡張するそうで、壊れゆく街を惜しみ、取り壊しや「立ち退きに抗ふ」詩人たちのつづつた詩の紙切れが壁に何枚も貼られています。

（泥土、私の存在の証。苦しいとき、いつも貴方を思い出す、と泥土を恋人にたとえた「恋人」と題された詩もありました。）近くに「鶏公車」がおいてあり、ここでこの場所を偲んで写真をとったり、記念帳がおいてあり思いを自由につづることもできます。良雨先生が句を残されました。途中、民家の庭を見せて頂き、おしろいはなの咲く庭でおはあさんが四川なまりで話していました。また「青磚」の門には「鳶もみじ」が垂れ下がっていたりして、道端には羽の抜けたチャボを足元に置き低い椅子に腰をかけている女性がいて、良雨先生がカメラを向けると恥ずかしそうにうれしそうに下を向いて髪を梳いていました。

その後、蜀人の胃袋を満たす市場へ行きました。トマト、なす、芋、青菜などの野菜、茸、豆腐、肉、なます、魚などあらゆる食材が並べられていました。禅次氏が成都に着いたときから何度も言われていたようにまさに「食は（広州ならぬ）蜀に在り」です。

さて、私たちもいよいよ最後の蜀の飯、「陳麻婆豆腐」の店で、「麻婆豆腐」はもちろん、四川風味の辛味の利いた食事を頂きました。お店では「麻婆豆腐の素」が売られており皆さんおみやげに。店先を担担麵売りが通ります。なつかしい成都、そして三日間お付き合い頂いた皆さんに別れを告げます。なんと、時間をフルに利用するため、飛行機の中で句会をするとのこと。邵さんも上海まで同行して選句に加わりたい御様子でした。将来は成都支部を作り、ぜひ蜀の地で俳句を広めて頂きたいと思えます。

まゆみの独り言

上海到着。バスの迎えがあり、街中まで一時間強。「上海南新雅酒店」にチェックインをすませ、徒歩で上海蟹のお店「王宝和」へ。どうも本店に来てしまったようで、別の棟に案内していただきました。蟹の卵の料理や、蒸し物、スープなど次々にお料理が運ばれ、ついに上海蟹が。ちよつとばかり静かになります。

さて、満腹になったところで、「満さんそろそろ」というお声が上ががり、「名乗り」の物まねの余興が始まります。存じ上げない方の物まねでも大うけで、特に孝子さんの「名乗り」は印象的でした。満先生の意外な面を発見。

食事の後、外灘（バンド）まで散歩しましょう、ということ
で夜の街に繰り出します。東方明珠のある新しい浦東地区と、
和平飯店などの立ち並ぶ旧租界地区と、そしてその間の黄浦江
には電飾の観光船が行き来します。道に迷いながらホテルにた
どり着きました。

成都空港発午後三時二十分MU5426

上海虹空港午後五時四十分着

夕食 王宝和

宿泊 上海南新雅酒店 (RAMADA PLAZA)

本日の歩数五五〇〇歩

成都から上海への機中句会

行く秋の時を豊かに太極拳
麻婆は蜀の自慢や新豆腐
朝露の羊歯に宿して薛濤陵
秋の水堰へゆたかに芙蓉城
麵売りの天秤さしむ紅芙蓉
取り壊し進む長屋の蔦紅葉
深秋や指にやさしき薛濤紙
蜀の秋朝道遥の竹小径
梅雨しとどおとがひ引きし詩人像
銀杏を割ると剥くとを手分けして
小山なす唐女の墓や草の花

棚山波朗
臺目良雨
袖口 満
武田禅次
武田孝子
中島八起
飯田眞理子
坪井研治
真木朝実
島谷高水
武井まゆみ



上海南新雅酒店
(RAMADA PLAZA)



外灘を背景に全員集合。



王宝和で上海蟹を食べる。



上海 東方明珠電視塔

まゆみの独り言

十二日（火）。

朝六時半集合、有志で再度朝のバンドへ、タクシーでガーデンブリッジの袂に着けてもらいます。自転車で来た野菜売りが店を広げます。ロシア領事館の玄関を見て、バンドへ。朝七時の鐘がなります。夕べもやはり十時に鐘がなりました。メロディーは「東方紅」です。バンドでは大極拳など運動をする市民も多く、また風がいくつもあがっています。ホテルを九時半に出発。いよいよ上海ともお別れ。再び「機上句会」が静かに行われ、毎日が濃密だった成都吟行の旅もいよいよファイナレを迎えます。成田へ安着。これまで記憶の限りを尽くして綴ってまいりましたが書き残した部分もたくさんあるような気がします。どうぞ寛容のほどを。

最後に、終始もの静かに一人一人に心を配って下さった棚山先生、未熟者の私の身近で俳句への情熱と継続は力なりの凄みを教えて下さった皆様方、そして何から何まで行き届いた質の高いご心配を下さった武田ご夫妻、みなさま一人一人に心より感謝を申し上げます、筆を置かせていただきます。有難うございました。

（了）

十月十二日（火）



外白波橋を渡ると旧日本租界。旧日本大使館はロシア領事館ひびいている。かつてこの橋は渡り賃を取っていたが外国人のみは白（無料）という意味で名づけられた。

上海浦東空港発午後十二時二十分発 MU521
成田空港午後四時着

上海から成田への機上句会から

蟹喰ふて街へくりだす夜長かな

棚山波朗

旧租界橋のたもとの茸売

墓目良雨

秋思かなガーデンブリッジ渡るとき

武田禅次

百年の跳ね橋に触れ秋惜しむ

飯田眞理子

花終えてなほ木屋の匂ひくる

島谷高水

東京は台風二十二号の影響で雨の降りしきる夜であった。

成都には私たちが廻ることのできなかつたものが沢山ある。
三星堆遺跡、九寨溝、峨眉山など数知れない。また機会が
あつたら成都を訪れてみたいものです。

(文章と写真は墓目良雨 写真の内③印つきは坪井研治 ①は
インターネットより借用。囲みの文章「まゆみの独り言」は
武井まゆみ。)

晩秋成都自選六句

棚山 波朗 吟

秋深し墨絵の山の幾重にも
龍淵に潜み渦巻く都江堰
秋声に蜀の石佛耳傾ぐ
大いなる佛の耳に穂草かな
転灯の夫の禿頭夜長劇
敗荷の影に遅れてゆらぎけり

墓目 良雨 吟

巴山夜雨杜甫草堂に残る虫
くれなゐの薛濤箋や竹の春
この父にしてこの子あり水の秋
飴売りの鉦の音いそぐ秋の暮
変面のたびに見得切り秋深む
上海蟹の頃の租界の灯のまぶし

柚口満吟

杜甫の詩に蘇軾の筆に秋のこゑ
廃れゆく成都小路の蔦紅葉
杜甫の詩を唱和する庭色鳥来
天高し交じりて荒ぶ三大河
竹春の園に真白き薛濤像
合流の大河に消ゆる秋の蝶

武田 禅次 吟

せめぎ合ふ渦に萩散る都江堰
傷つきてなほ石佛へ秋の蝶
弩の放つ鏑の光や秋深む
秋の色深ぶかある蜀の国
竹林の杜甫の石像秋まとふ
秋うらら担々麵売る振り荷籠

武田 孝子 吟

岷江の流れに遅れ霧燕
合流の渦の曼陀羅秋の蝶
小春日の大仏蝶へささやけり

鳴ることもなき諸葛鼓や秋の声
竹林や劍舞音なく露こぼす
秋芽吹く是父是子の榕樹かな

飯田 眞理子 吟

奔流に動じぬ堰や秋燕
杜甫の詩の韻のひびきや秋深し
札遊びに軋む竹椅子秋麗
竹の風つる草堂暮の秋
苑内の小橋めぐりて秋惜しむ
かたはらの画眉鳥啼けり竹の春

中島 八起 吟

魚嘴洗ふ濁流ゆたか秋燕
朝霧や日本租界をしのぶビル
身に入むや浦江をすべる達磨船
温め酒上海蟹の味噌ほじり
立ち退きのすみし廃屋秋簾
沫若の古りし文机秋暑し

真木 朝実 吟

行く秋の杜甫草堂に花茶飲む
切り絵めくポンポン船や秋没り日
取り壊し決まる市街や紅芙蓉
木犀の香に入り香に出づ蜀の旅
豊作の成都平原靄深し
肌寒や渦巻き激し古代堰

島谷 高水 吟

楽山佛あふぎて秋の河のうへ
秋収終へて川劇芝居の夜
川霧に消ゆる山腹秦堰楼
杜甫像の肌温もれる秋日かな
面かへるたび大歓声や蜀の秋
竹の皮散りある朝の太極拳

坪井 研治 吟

川霧や蜀豊稔の秋の声
椋鳥が榕樹古木を賑はせり
露の玉しきりに垂るる蜀の竹

川劇に夜寒を忘れ夢中かな
白字なる杜甫木刻に秋日さす
秋深し蜀吟行の果てるなき

武井 まゆみ 吟

(邵全麗さんへ)

水澄むや蜀の娘は氣立て良し
霧深し岷江守る二王廟
さやけしや根の幹と化す蘇洵の樹
練りいろや天府の国の新豆腐
旧租界迷ひし道や地虫鳴く
秋の江往き交ふ船の分れかな

良雨中國俳句紀行シリーズ

俳句紀行「晩秋成都」

平成十六年十月二十五日 発行

編集人 藁目良雨

企画 武田禅次

写真 藁目良雨
坪井研治

エッセイ 武井まゆみ
俳句監修 武田孝子

印刷・デザイン

青蛙堂



一〇一〇〇五二 東京都千代田区神田小川町三十一
(ユーラン社内)